

メキシコ大地震が

教えてくれたこと

星野妙子（メキシコ）

私はメキシコに住んでしばらくの間、メキシコ人を、組織的行動が苦手な人達と考えていた。また、個人主義で、他人の災厄には関りたがらない人達と教えられてきた。そのような考えが覆されたのは、メキシコに二年ほど住んだ後の、一九八五年九月一九日のことである。

その日の朝、いつものように目を覚ましベッドから離れようとした時、ゆっさゆっさと大波に揺られたような衝撃を感じた。隣の部屋からは下宿のおばさんの「キヤー」という悲鳴、続いて「机の下へ！」という叫び声。マグニチュード七・八、四〇〇名近くの死者（政府発表。ただし正確な死者・行方不明者数は今でも不明という）を出した「メキシコ大地震」であった。幸い私の住んでいた一帯は被害を免れた。しかし数キロのところにある国立病院は、数棟ある病棟が全壊した。市の中心部は、建物が軒並み倒壊し壊滅状態であった。筆者の知らないメキシコが姿を現したのは地震後まもなくである。

未曾有の大地震というのに社会はいったん落ちて着いていた。当時メキシコは三年越しの経済危機のまっただ中で、生活苦から国民の不満が高まっていた（はずである）。治安も悪化していた。私のアパート

から徒歩で行ける範囲の銀行で、襲われたことのない銀行はないといわれたぐらいである。しかし暴動も略奪も起きなかった。起きたのは、自然発生的な市民総ぐるみの被災者救援活動であった。

私が所属していた教育・研究機関コレヒオ・デ・メヒコでは、早速、ボランティアの組織化が始められた。まず事務所の開設、有志の登録、そして外部組織との接触。コレヒオは、同じ教育・研究機関ということでもメキシコ国立自治大学のボランティア組織と一緒に活動することになった。活動にはふたつのタイプがあり、ひとつは市内いたるところに開設された避難所へ物資、特に食事を届けること、もうひとつは研究機関の特性を生かした地震の被害調査であった。私もボランティア登録したところ、被害調査の仕事を担当がわれた。

救援活動で存在感を示したのはマスメディアであった。物資、人手の動員でテレビ・ラジオが威力を発揮した。それを端的に物語るエピソードがある。多数の死者を出した倒壊建物の中にトラテロルコの団地群があった。ここには世界的なテノール歌手プラシド・ドミンゴの叔父一家が住んでいて、彼らも生き埋めになった。若き日をメキシコで過ごしたドミンゴは、すぐに被

災地に飛んで救助活動の先頭に立った。その彼をテレビがインタビュした。髭ぼうぼうでヘルメットをかぶり不眠不休で救助活動に当たるドミンゴの姿がテレビに映し出され、その彼が「人手がなくて救助がほとんど進んでいない。協力者を募る」と呼びかけたところ、応じきれないほどの数の人間が集まった。多くがテレビを見ていた普通の市民で「ちよつと行ってくる」と、スコップを持って出かけていったという。

メキシコの人々は過去に例をみない災厄を、市民の連帯と冷静な対応で乗り切った。私はその姿をみて、メキシコ人に対する見方の底の浅さを反省した。ただしつけ加えれば、このような展開はメキシコ人自身にとっても予想外だったようである。地震で示された団結力によって、多くのメキシコ人が経済危機でとかく失われがちだった自信を取り戻したという。

この話にはまだ先がある。この一月の阪神大震災でのボランティアの活躍ぶりを見て、あの時のメキシコ人の姿に「メキシコの」という形容詞がふさわしいのか自信がなくなってきた。ひよつとしたら、よりふさわしい形容詞は「人間の」なのかもしれない。

（ほしの たえこ／地域研究部）